

『とりかへばや物語』登場人物の位相—形容語彙からの考察—

Typology of Characters in *Torikaebaya monogatari*

小松 可奈子

Kanako KOMATSU

一 「とりかへ」に至る経緯、人物を形容する特徴的な語彙

男女の性の交錯を描いた『とりかへばや物語』は、中世王朝文学の中でも、男女取り替えという特異な趣向を持つ作品と位置付けられ、新しい境地が開拓されたと考えられている。しかしながら、一方で、平安物語の流れを汲み、先行する物語の表現に依拠しつつ、作品化されているように思われる。この物語には、主要登場人物を造型する語レベルの表現に、先行物語と重なる使用傾向が見いだせる。それは、『源氏物語』などで確立した登場人物の性格つけや生き方の姿勢を描こうとする伝統にのっとりながら、男らしさ、女らしさの表現を生かして、男女の交換という特異なテーマを活写するために行われたものでもあろう。

本稿では、作品を分析していく切り口として、人物を形容する語彙を抽出して、物語展開における様相と、登場人物相互の関係を眺めていくことにした。

主要人物として扱う対象は、「女君」（本来の性）、「男君」（本来の性）、そして「宰相中将」「四の君」、「吉野の姉宮」「吉野の中の君」「宇治の若君」「女東宮」の八人である。これらの人物は、昇進や以後の変化にかかわらず、便宜上、この呼称で統一する。

この物語の主軸の一つは、主人公であるきょうだいの性の交換である。本格的に性の「とりかへ」の問題が浮上するのは、彼らが成人して社会的に認知されてからである。だが、性の「とりかへ」の下地は、幼少時から描かれている。時間の経過にしたがつて、その成長を確認したい。なお、考察にあたっては、論を進める都合上、引用本文に以下、主に女君の形容に用いられる傾向を有す

る語には [] を、主に男君の形容に用いられる傾向を有する語には [] を付した。

A 君たちの御容貌のいづれもすぐれたまへるさま、ただ同じものとのみ見えて取りも違へつべうものしたまふを、同じ所ならましかば不用ならましを、所々にて生ひ出でたまふぞ、いとよかりける。

大方はただ同じものと見ゆる御容貌の、若君は [あてに] [かをり] [気高く]、[なまめかしき] 方添ひて見えたまひ、姫君は [はなばなと] ほこりに、見ても飽く世なく、あたりにも [こぼれ散る] 愛敬などぞ今より似るものなくものしたまひける。

* 引用は、石椋敬子氏校注の、新編日本古典文学全集 39 『とりかへばや物語』（小学館、二〇〇二年）による。

この時点では、男君が「若君」、女君が「姫君」とされ、二人の将来は暗示されていない。また、生まれて間もなくは顔立ちが瓜二つだったことも書かれている。しかし、男君に「あてなり」「かをる」「気高し」「なまめかし」が見られ、女君には「はなばなと」「愛敬」が見られるように、顔の造作を超えた個性の相違、周囲に与える印象の違いは既に確立しつつあるように描く。

また、それぞれの性質は、次第に生活態度やふるまいにも表れてくるようになり、男君が「姫君」、女君が「若君」と呼ばれる事態に発展する。次のBCは、いずれも父左大臣（当時は大納言）の視点による。なお、一般的に男性の形容に用いられる傾向を有する語に——線を付し、一般的に女性の形容に用いられる傾向を有する語に——線を付した。

B 男君（「姫君」として登場）

：御髪は丈に七八寸ばかり余りたれば、花薄の穂に出でたる秋の気色おぼえて、裾つきのなよなよとなきかかりつつ、物語に扇を広げたるなどちたたく言ひたるほどにはあらで、これこそなつかしかりけれ、いにしへのかぐや姫も気近くめでたき方はかくしもやあらざりけんと見たまふにつけては、（中略）十二におはすれど、かたなりに遅れたるところもなく、人柄のそびやかにてなまめかしきさまぞ限りなきや。桜の御衣のなよかなる六つばかりに、葡萄染めの織物の袷、あはひにぎははしからぬを着なしたまへる、人柄にもてはやされて、袖口、裾の袷までをかしげなり。

C 女君（「若君」として登場）

西の対に渡りたまふに、横笛の声すぐく吹き澄ましたなり。空に響きのぼりて聞こゆるに、わが心地もそぞろはしく、めづらかなり、これもさななりと聞きたまふに、また心地もかき乱るやうなれど、さりげなくもてなして若君の御方をのぞきたまへば、うちかしこまりて笛はさし置きつ。桜、山吹など、これは色々なるに、萌葱の織物の狩衣、葡萄染めの織物の指貫着て、顔はいとふくらかに色あはひいみじうきよらにて、まみらうらうらう、いづことなくあざやかにほひ満ちて、愛敬は指貫の裾までこぼれ落ちたるやうなり。見まほしく目も驚かるるを、うち見るには、落つる涙ももの嘆かしさも忘れられてうち笑まるる御さまを、あないみじ、これももとの女にてかしづきたてたらんにいかばかりめでたくうつくしからん、と胸つぶれて、御髪も、これは長

さこそ劣りたれ、裾などは扇を広げたらんやうにて、丈に少しはづれたるほどにこぼれかかれる様体、頭つきなど、見るごとに笑まれながらぞ、心のうちほくらざるや。

この時点になると、男君は「姫君」、女君は「若君」と呼ばれ、男君は女子のように、女君は男子のように生活していることが書かれる。各人の好みや性格に合った生活は、本来の性とは異なるものであった。それでも、彼らの異常な生活の奥に、顔立ちや雰囲気ではなく、体格の方は隠すべくもないものとして、本来の性を匂わせている。二人の個性は、この成長段階にあつては、傍線・波線のように、確立しつつも混同しており、未分化であるといえる。これが、「とりかへ」を可能にした要因であろう。ただし、男君の「あてかざる」**気高し**「なまめかし」、女君の「**にほひ・愛敬**・うつくし」など、長じても変化しない、個性も表現されている。

二人は世評の高いきようだいとなるが、世の人は、男君と女君を取り違え、誤認する。さらにこの状況は父左大臣によって是正されることなく、そのまま、女君の「元服」、男君の「裳着」に至らざるをえなかった。女君の「御才（漢才、男性必修のもの）、容貌すぐれたまへる」を「内、春宮」が聞いて、童殿上もしていないからと、叙爵させ、元服を促した。そこで、男君の御裳着、女君の御元服となったのである。家庭内の異常な事態が、そのまま社会的に移行していくのである。

ところで、きようだいの「とりかへ」が行なわれたのは、それぞれの性格や個性によるところが大きい。女君は非常に男性的資質を持ち、逆に男君は女性的資質を持っていたということである。それでも男君の「なまめかし」や女君の「愛敬」など、お互いを特徴づ

けながら、両者を書き分けようと意図したと考えられ、きようだいは個々の人格を与えられる。

この稿では、このような傾向を有する語彙を抽出し、表現の方法を解明していきたい。さらにはこの作業を他の作中人物にも及びし、彼らに関しても彼らの特徴づける語彙があるか、その連関について考察していきたい。その際に、樋口育代氏『とりかへばや』男装の姫君の「はなばなと」について（『甲南国文』49 二〇〇三年三月）が、一つの道筋を示してくれる。氏は、「美的語彙」を考察の対象にし、特に「はなばなと」に着目、先行作品も視野に入れて、「はなばなと」が女君を特徴づける語とした。また、美的語彙の使用に時間の経過や物語の展開は影響せず、きようだい二人の美質は一貫して書き分けられ、その使用回数の多さから主人公は女君といえるとしている。

氏の論旨にさほど異論はないが、登場人物と語彙との密接な関係は、きようだいにとどまらず、また、形容も美的資質だけではないだろう。多角的にとらえるためにも、欠点を表現すると考えられるものも無視できない。したがって、考察の対象を他の言葉、他の人物に広げ、主要な作中人物と彼らを形容する語彙とその特徴の関連を調べ、さらには作者が目指した作品世界を読み解いていきたい。

女君の形容語彙を調べていくと、男君をはじめとして作中人物の人間関係や物語の展開と無縁ではないと思われるので、特にある傾向を有するかと思われるそれらの語彙を表にした。表1である。男装時代、本来の女性姿を二期に、一貫した性質、と四つに分けた。男君については、表2とした。また、両人をよく照らしだす人物として、宰相中将以下の六人について、表3にまとめた。

表1 女君の生涯とそれを特徴づけると考えられる代表的な語彙の一覧

異装の時代	本来の姿		一貫した性質
	宇治時代	今尚侍／中宮時代	
はなばなど(11) うつくし(7) うつくし(2) うつくしげなり(1) うつくしげさ(0) にほひ(0) にほひ(0) にほひ(4) にほひ(1) にほひ(4) 愛敬(0) 愛敬(5) 愛敬(23) なつかし(1) なつかし(1) なつかし(4) なつかし(1) はなやかに(5) たをたを(3) ささやかに(2) いほけなし(3) 雄々(3) びびし(3) あざやかに(2) けさやかに(1) まめなり(2) まめやかに(8) のどやかに(6) すくよかなり(10) なよよかなり(2) かをり(1) あて(1) あて(1) きよらなり(2) きよらなり(2) らうたし(1)	はなばなど(4) うつくし(2) うつくし(0) うつくしげなり(4) うつくしげさ(0) にほひ(4) にほひ(1) にほひ(3) 愛敬(0) 愛敬(4) なつかし(3) なつかし(0) なつかし(1) はなやかに(1)	はなばなど(0) うつくし(3) うつくし(0) うつくしげなり(2) うつくしげさ(1) にほひ(1) にほひ(0) にほひ(0) 愛敬(1) 愛敬(5) なつかし(2) なつかし(0) なつかし(0)	はなばなど(15) うつくし(12) うつくし(2) うつくしげなり(7) うつくしげさ(1) にほひ(14) にほひ(3) にほひ(7) 愛敬(9) 愛敬(14) 愛敬(28) なつかし(1) なつかし(5) はなやかに(6)
	わららかに(1) なよよかなり(1) なよよ(2) たを(1) らうたし(1)	のどやかに(1)	
		気高し(1)	

表2 男君の生涯とそれを特徴づけると考えられる代表的な語彙の一覧

異装の時代	本来の姿	一貫した性質
なまめかし(4) なまめく(2) あて(5)	なまめかし(0) なまめく(5) なまめきぎま(1) あて(3)	なまめかし(4) なまめく(7) なまめきぎま(1) あて(8)
かをり(2) かをり(1)	かをり(1)	かをり(3)
気高し(2)	気高し(1)	気高し(4)
きよらなり(0)	きよらなり(9)	きよらなり(9)
にほひ(1)	にほひ(1)	そびやかに(1)
愛敬づく(2)	なつかし(1)	そびゆ(1)
なつかし(2)	なつかし(1)	
そびやかに(1)	あざやかに(1)	
らうたし(1)	ものあざやかに(1)	
けさやかに(1)	あざあざと(1)	
たをたを(2)	すくよかなり(4)	
なよよ(1)	びびし(1)	
なよよ(1)	まめまめし(1)	
なよよ(1)	なよよ(1)	
なよよ(1)	なよよ(1)	

表3 きょうだいをとりまく主要人物と各人を特徴づける代表的な語彙の一覧

人物	各人を特徴づける代表的な語彙	
宰相中将	なまめく(5) すくよかなり(2) まめなり(2)	なまめかし(3) 雄々し(1) まめやかなり(1) あて(2) いはけなし(1) まめだつ(2)
四の君	なまめかし(2) あて(7) らうたげなり(8) こめく(3)	なまめく(2) あてはかなり(1) らうたさ(1) こめかし(3) なよなよ(2) たをたを(1)
吉野の中の君	愛敬つく(4) うつくし(1) らうたし(1) こめく(1)	はなはなど(1) うつくしげなり(4) らうたげなり(1) こめかし(2) なつかし(1)
吉野の姉宮	なまめかし(4) 気高し(4)	なまめく(1) あて(6)
宇治の若君	いはけなし(3) うつくし(4) 御うつくしき(1)	にほひやかなり(1) うつくしげなり(2) 愛敬つく(1) なつかし(1)
女東宮	おほどかなり(1) 小さし(1)	らうたさ(1) あて(2)

※()内は合計

これらの表をもとに、人物と語彙との関係、物語の進行との絡まりを考慮しながら、考察していくことにする。まずは、女君、男君とに分けて、その中で、他の主要人物も触れていくかたちをとる。

二 女君を特徴づける語彙から

樋口氏は、前掲論文で、「はなばなど」を考察し、この物語の主人公は女君であると結論付けている。作中における女君の描写は多くで、きょうだいが本来の性に戻るまで、女君を中心に展開していくと言って差し支えないだろう。だが、物語の展開に呼応して、登場人物を形容する語彙は変化している。つまり、使用語彙そのものの変化、個々の語彙の使用数の増減などで、もつとも顕著なのは女君である。女君について

- i 女君の男装時代
- ii 女君、本来の姿に戻って
- iii 女君の一貫した性質

の順序で、より詳細に考察を進めていくことにする。

語彙の使用状況の変化から作品へアプローチしたが、使用される語彙の中には、いうまでもなく i、ii、iii において重複するものが存在する。また、他の人物と重複する語彙もある。重複する語彙もそうでないものも含め、女君の人物造型を多角的に認識できると考え、右の構成をとった。

ただし、論の展開上、男君や、その他の人物について言及せねばならない場面が多くなることを、あらかじめ断っておきたい。

i 女君の男装時代

本作品の最大の特徴は「異装のきょうだい」であり、ことに男装の女君がもつとも活躍するため、女君の描写はこの時期のものが最多である。男性として社会に出るまでのことは、前節で踏まえたとおりで、彼女の性格や能力に本来は男性にあるべき資質が見られたことが確認できた。

男装時代の女君は、男性として官人として生活しているため、「雄々し」「びびし」など、一般的に男性の形容に用いられることの多い語彙による表現で描写される。さらに、「すくよかなり」「まめやかに」「のとやかかなり」なども見出させるが、これらは男性の形容に用いられる語である。男装時代の描写に男性的形容が用いられるのは不思議ではないが、女君の場合、独自の意味付けがある。二つのグループにします考察を進めたい。

①「雄々し」「びびし」

「雄々し」という語は全四例あり、女君に三例、宰相中将に一例である。最初の用例は宰相中将に対してのもので、五節での女君と宰相中将の様子と、彼の魅力が描かれる。

ア 宰相はいとそそろかにををしく、あざやかなるさまして、
なまめかしう よしあり色めきたる気色、いとをかしう見ゆ。

(巻第一)

宰相中将は体格、性格など、男性らしい男性性として造型され、「そそろかに」と背がすらりと高く、男っぽく(ををしく)、きつぱりとしている(あざやかなる)。彼に対する形容語彙が、男性性を表現する語彙の典型である。宰相中将はきょうだいの性的な面を照射する人物で、彼が配されてこそ、きょうだいの異常さが理解で

きるのである。

女君に対する「雄々し」は三例で、最初に女君を「雄々し」とするのは四の君である。宰相中将との密通の後、四の君は、夫である女君を以下のように評する。

イ……いささかををしく荒々しきけはひもなくただうち語らひて
過ぐしつるは、つゆにても心置くふし交じりてもおぼえざり
つるを、

(巻第一)

彼女が夫を「雄々し」くない人」と感じる場面で用いられている。イでは、女君と四の君の夫婦生活が理解できるのではないか。そもそも、二人の結婚は「ただうち語らひて過ぐしつる」ことで実現したのだが、四の君は宰相中将との関係によって、男性というものを知った。夫をこのように評価するのは自然ではないか。

次の用例は、宰相中将によって強制的に異装を解かれて後のもの。秘密を知られた女君が宰相中将に身を任せきっている様子は、男装で身を固めた平素のそれとはかけ離れたものである。

ウ 明るも知らず、もろとも起き居つつ見るに、近づくとくも
あらずあざやかにもてなしすくよかなるこそ雄々しかりけ
れ、乱れたちてうち靡き解けたるもてなしは、すべてたをた
をど、なつかしう、あはれげに、心苦しうらうたきさまぞ限
りなきや。

(巻第一)

「雄々し」とはされるものの、男装の時代を過去形で書かれていることは注目したい。宰相中将にとって、すでに男姿の女君は過去のものである。目の前の女君を見て、普段の様子、つまり男装の姿を思い起こして「雄々し」となるのである。

女君が「雄々し」とされる最後の用例は、きょうだいの惜別の場

面で、次は男君の視点によるものである。男君は相對している女君を見て、普段、威儀を正していた女君を「雄々し」と思うのである。

工…大将の **はなばな**と **にほひ** 限りなき容貌の、いたく面瘦せたるしもいとど **うつくしう** **らうたげ**なるに、おほやけしくもてすくよけたるほどこそ **雄々しくも見え**けれ、かやうに思ひしめり屈じたまへるは **たをたを**と **あは**れに **なつかしく** 見ゆるを、… (巻第三)

ここでも「雄々し」という印象は過去のもので、女君の持つ女性美ともいふべき「らうたげなる」「たをたを」となどのほうに筆が割かれている。女君と「雄々し」という言葉は、基本的に結びつかない。むしろ、それを凌ぐ女性的な要素が際立っているのである。「雄々し」という語でも、宰相中将にあつては魅力だが、女君にあつてはそうではない。さらに物語の展開によつて女君が女性化していくにつれ、用例工のように、女性的な資質が表面化するのである。

「**びびし**」という語は、物語の後半になつて使われる語彙で、女君に三例、男君に一例見られる。父左大臣による視点のものが二例である。

女君を最初に「**びびし**」とするのは、失踪した彼女の探索から帰京した男君と對面する場面である。父左大臣は、男君は、女君のよくな華やかな性質を持たないため、男姿となつても見劣りするだろうと懸念するのである。ここで「大将」とされるのは、女君である。

オ…幼かりしときより交じらひつきたまひにし **大将こそびびし**

かりしか、**あえか**に人にも見えず籠りたまひてし人とは思ふに、かたくなしくおはすらんと、… (巻第三)

ここでも、女君をあくまで過去形で形容していることを考慮しておきたい。

女君が「**びびし**」とされるのは今尚侍となり、帝と契る場面である。

カ 男の御様にて **びびしくも**てすくよけたりしだに、中納言に取り籠められては **え逃れ**やりたまはざりしを、まして世の常の女び、情なくは **見えた**てまつらじと思すには、… (巻第四)

男装の時にさえ宰相中将の腕力に負けてしまったのだから、まして女姿となつて男女の情を解さぬようには思われたくないと考えて、とある。「中納言」とは宰相中将を指す。

ここで、男君に對しての「**びびし**」も見ておきたい。男君が「**びびし**」とされるのは、きょうだいの「とりかへ」が実現し、もとの男性として帰京し、きょうだいが父左大臣に對面するときである。

キ **いみじくうつくしげに** **なつかしう** **はなやかなる** 女の、
髪は **つやつや**ゆらゆらとかかりていと **いみじく**めでたくて、
なよやかなるさまにて居たまへるも **夢のやう**に、**えも**言はず
きよらなる男にてありつき、**びびしく**て **さぶら**ひたまふも **現**
ともおほえず、… (巻第三)

女君の用例では過去形であつたものが男君においては現実的なものとなる。このような書き分け方がなされるのも、異装を超えた二人の本来の性を浮き彫りにするためではないだろうか。

「雄々し」「**びびし**」とも、女君においては現実的な魅力とはならない。男の格好をしている女君と相對して、「雄々し」「**びび**

し」と感じる人はない。本物の男性に触れたうえで男装の頃の女君の印象を語るときに用いられている。一方、男君には現実的な美点として描かれるのである。

この二つの語は、本来は男性を形容する傾向を有する語だが、この作品では、きょうたいを書き分ける語であると言えないだろうか。女君にとつては、男性として何不足ないように見える中で、数少ない不足要素として、男君には、美質として用いられている。衣装やふるまいで補いきれない資質、二人の性差が描かれている。

②「すくよかなり」「まめやかに」「のどやかに」

これらの語にも、独自の意味付与のあとが見出される。

「すくよかなり」は十七例用いられ、女君に関するものが十例、男君に四例見ることが出来る。官人として男社会に身を置いているため、女君における「すくよかなり」は、常に男性との関わりの中で用いられる。女君が男として男性とどのように付き合っているかが理解できるかと思う。

女君の平素の様子は次のとおりである。女君は、男性がもつ好色心を持たず、人を遠ざけがちな性格であると。その理由は、宰相中将には思い至らない。普段から沈みがちな女君をいぶかしむ宰相中将に対して、そっけなくふるまうのが、男装の女君の常である。

クうち出づることには、人の御身の世づかざりけることのみ知らるるに、胸うちつづるれば、いたくもあひしらはず、言少ななるほどに心恥づかしうのみもてなしたるを、妬く恨めしと涙をもつつまず思ひ焦られたる気色の心苦しさを見ることも、(中略)ただ情けなくもてすくよかなるさまにてぞたち別れける。

(巻第一)

男君(尚侍)への思いを果たせずに涙ながらに愚痴を言う宰相中将に対して、言葉少なに、そっけなく(「すくよか」)に應對する。それは、巻二になって、女君が宰相中将に契られ、宰相中将は女君に執着するが、秘密を知られた女君は関係に悩み、宰相中将を避ける時にも使用され、「すくよかに言ひ出でたり」と、対面を断っている。

もともと人を遠ざける傾向のあつた女君だが、宰相中将との一件で、男性に嫌気がさし、帝に対しても慇懃にふるまって、尚侍(男君)には一般的な結婚の意志がない旨を奏上する。そのときも、

ケ気近く馴らしては宰相に懲りにたれば、まめやかにかしこまりて、いかにも世の常の有様を思ひ離れたるさまをすくよか

に奏してさぶらふが、… (巻第一)

以上のように、男姿で「すくよかなり」とされるとき、女君の態度は毅然とした、他人を近づけないようなものとされる。秘密を知る人があつては、ますます頑なになる。男装の頃の女君は、並ぶものない君達だが、男性に警戒を解くことがなく、「世づかぬ」という苦悩のために憂悶から逃れられない。男性に対する警戒心と、秘密を持つ身であるということが「すくよかなり」によつて表現されるのではないか。「すくよかなり」は主に男装の頃に見られるが、本来の姿を獲得した後、過去の印象として語られる。これは、前項の「雄々し」「びびし」とも共通する。

互いに異装を解いてからのきょうだいの対面で、女姿となった女君は、宰相中将との不本意な関係を男君に打ち明け、父左大臣には知られたくないと語る。かつてのような毅然とした様子はない。

□「殿に、かくてこそありけれと聞こしめされじ。ただ世づか

ざりける身をもてわづらひたりけるさまを」と、うち恥ぢら
ひたまへるも、年ごろいとすくよかなりし人の御もてなしと
も見えず。

(卷第三)

ここで頭注を参照したい。「恥ぢらひ」はかつての男君の特性で
ある。右の男君と同様に、宰相中将も男装時代の女君には、「すく
よかにおし放ちて見るめでたさ」(二七三頁)という魅力にあふれ
ていたと、女性にもどつた女君の魅力との違いを見ていた。同じ語
で、異装の時ともの性にもどつた時の差異が鮮やかに描かれる。

さて、きょうだいのとりかへが行われ、女君は男性となつて自分
の代わりに生きる男君にいろいろと教えこむ。二人の琴笛がかなで
る音色も、筆跡なども、全く遜色なく、さらに、異装の頃、男君は
女の、女君は男の口調を真似ていたに過ぎなかつたため、元に戻る
のに支障はなかつたのだと語り手は言う(「御声けはひなん、もと
これは男の女まねひたまひしなれば、女のすくよかに使ひ馴らした
まへりしなれば、もとよく通へる御けはひいづくかは違はん」)。

こうして、異装の頃の女君に見えた「すくよかなり」は、異装解除
後、次のように男君へと移行し、物語の主体も徐々に男君へと移る。

サ 御前に参りたまへれば、とばかり御覽すれば、久しかりつる

月ごろのほどにいとどこよなくなりまさりにける心地して、
かをり **あてなる** ところさへ添ひにけり。あはれ、かかる人

のやがて様を変へてましよ、いみじき世の憂へにこそあらめ、
とうちまもらせたまひて、涙をさへ落とさせたまひけり。

雲の上も闇にくれたる心地して光も見えずたどりあひつる
とのたまはず。うちかしまりて、

月のすむ雲の上のみ恋しくて谷には影も隠しやられず

と奏したまへるさま、さは言へど、いとすくよかに、ものあ
ざやかなるところさへ添ひにけりと、目もあやに御覽せらるる。

(卷第三)

今大将となつて参内した男君を見て、サのように、帝は、大将の様
子に「かをり」「あてなる」が加わり、さらに凛々しさが備わつた
と感じる。女君は、態度やふるまいが「すくよかなり」とされた
が、男君は、人柄や性質が「すくよかなり」とされる。

さて、男君が女君と入れ替わつて帰京してから、宰相中将は男君
「大将」に接触しようとした。

シ 内裏などへも、大将かならず参りたまふらんとおぼゆる日は

我も参りつつ、さりげなくて目をつけきこえたまへれば、か
れもさすがに見合はせたまへば、うちまめたちつといとすく
よかにもてなして、おのづから馴らさるべくもなきぞいみじ
う心やましかりける。

(卷第四)

男君が宰相中将を避けるときには、「すくよかに」そつけなくふる
まうことで、宰相中将に付け入る余地を与えない。

「すくよかなり」という語は、男君と女君ともに対男性に用いら
れるが、女君の「すくよかなり」には、必要以上に不特定に男性を
遠ざける向きがあつた。男社会に身を置いていた女君は、人を突き
放すことで防衛していた。一方、男君においては長所、美点として
用いられ、男君が避けるのは、女君の秘密を知る宰相中将のみで、
微妙なニュアンスの表現となる。

男装時代の女君の態度を表現したものに、男性的な語が多いこと
は以上のようなのである。女君自身の意識が常に女性であつたと、作
中、何度も書かれている。本来男性を表す「まめやかなり」や、

「のどやかかなり」の二つにも、実は女性性の表われと感じられる。男性の外見と女性の意識という分裂を表現したものと思われるので、さらに吟味したい。

「まめ」を語幹とする語は、本来は男性の形容に用いられる傾向があり、真面目さ、身持ちの堅さを強調する。私が言及したいのは「まめやかかなり」である。「まめまめし」は男君にのみ、「まめだつ」は宰相中将にのみ用いられるが、「まめやかかなり」は女君に最も多く、全九例のうち、八例が女君に、一例が宰相中将に使用される。

出仕した当初の女君は、我が身の異常を思い知りながらも、身を隠すこともできない。女君は我が身を「よからぬ身」「世づかぬ」とも意識し、無論一般男性のように女性に関心を示すことはない。それを、「いとまめやかにもてをさめたるを、さうざうしく口惜しと思ふ人多かり」（巻第一）と、「まめやかに」と表現し、女性たちは寂しく残念に思う。

宰相中将が四の君に密通するきつかけとなつた垣間見のときに、宰相中将は、

又ゆきかかづらふ所もなくいとあまり世づかぬまでまめやかなるを、何事の心尽くしなるにか、と聞くに、いよいよ過ぐしがたくなりまさりて、押し開けて、つつまず歩み入りたまふを、
(巻第一)

夫たる女君に対して「まめやかかなり」と、ほかに通う女もなく常識はずれに真面目な人柄と思う。

さて、密通の末、四の君は懐妊するが、真相を知らない父右大臣は狂喜する。女君が他の女性に目もやらず、四の君一筋なのを、「まめやかなるさまの、ありがたく、世の例にも引き出でつべきぞ

かし」（巻第一）と想うのである。

また、ケの用例にも「まめやかに」が見られた。女性関係ではなく、帝との謁見においてである。宰相中将との関係で苦悩する女君は、女性だけでなく、男性に対しても身構えている。「まめやかかなり」とされるとき、真面目さと同時に、多く女性を近づけない様子が書かれる。女君は、男性としての行動と意識との間に乖離がある。男装の頃の女君にとつて、最優先事項は、我が身の秘密を守ることであり、身持ちが堅いと生真面目であるだけでなく、他者の介入を許さない部分があるのではないか。

「のどやかかなり」が人物の形容に使われるものは七例あり、六例が女君に用いられており、五例が男装時代に、女性との関係で用いられている。前項の「まめやかかなり」も主に対女性で、女性に無関心であるという姿勢が描かれていた。「のどやかかなり」は実際に女性と接近した場面で見られる言葉である。

女君は、麗景殿の女と親しく歌を交わすものの、「のどやかに」立ちたまへる」（巻第一）と実際に至らずに立ち去る。麗景殿の女は女君の魅力に感じ入るが、その態度を囁かかね、腑に落ちない思いを抱くのである。

四の君は宰相中将との密通後、徐々に宰相中将になびいていく。女君と四の君との結婚生活は中身の無いものだが、そのような結婚を実現させられる相手として、四の君は女君と娶わせられた。四の君は女君の態度は立派だと思つたが、体裁を繕うために過ぎないと、無意識に感じていたのではないか。宰相中将を知り、次のように、彼の態度こそ愛情が深いというものではないか、と思つたのである。

セ 中納言の、いとめでたくすぐれながら、よそよそにて人目ばかり情けあるさまにのどやかにさまよき目移しには、かういといみじく死ぬばかり思ひ焦らるる人を心ざしあるにこそと思ひながら、… (巻第一)

四の君の懐妊は、女君には裏切りとしか映らず、厭世観を強め、女君は吉野の宮を訪れた。その折に、宮の娘たちと親しくなり、姉宮のもとにしのび込む。その時も「いとどのやかになつかしうこしらへ慰むれど」(巻第一)とあり、添い寝するだけのところが、「のどやかに」と記される。

吉野から帰京した女君は右大臣邸を訪れ、妻四の君と対面するが、お互いに気まずい思いをする。娘夫婦の様子をうかがう右大臣は、女君を高く評価しながらも、不信感が拭えない。

ソ 姫君をも、「などかくては臥したまへる」とせめて起こし据ゑて、よろづにつくろひ据ゑたまふもかたはらいたく苦しきに、入りたまふ音すれば、もの後ろに立ち隠れてのぞきたまへば、日ごろのほどに容貌はいますこしにほひまさりにける心地して、はなばたと愛敬はあたりにもこぼるるやうにて、いとどのやかについで、 (巻第一)

「のどやかなり」とされるとき、端的に言えば実事がないのである。女性との交流において、女君の態度もふるまいも、男性のそれに違いないのだが、最後の一步手前で終わってしまう。いたしかたないことなのだが、相手の女性は、自分の男性に対する認識と、女君の行動に違和感を覚えずにはいられない。

四の君は、非常に子供っぽい性格から、そんな女君の妻にふさわしいと言われ結婚した。しかし、宰相中将を知った四の君は、夫と

しての女君の態度を「よそよそにて人目ばかり情けあるさま」とする(用例セ)。女君の態度が表面的なものに過ぎないことを、一番直感的に感じ取っていたのは四の君であらうかと思う。おそらく、女として愛されているという実感を得られなかった四の君が、宰相中将の態度に動かされたのは、自然なことではなかったか。この言葉を見てみると、単に「男」としての女君にとどまらず、「夫」としての在りかたが見えてくる。女君と四の君の夫婦生活がいかに不幸なものであるか理解できるのではないだろうか。「夫」としての女君の、男装時代の一側面である。

「すくよかなり」「まめやかなり」「のどやかなり」について、その表現傾向を見てきた。これらには、女君の男性観とその行動と、世間一般の男性観とのずれが垣間見える思いがする。この物語独自の意味付けとは、ここにあるように思う。女君の場合は、中身を伴わない、外面的なもので、男君をはじめ、他の男性の場合には内面から感じられる資質として、書き分けられている。

四の君の懐妊に直面して、夫としての自分と、世間的な男女のこととの隔たりを実感し、女君自身は、「大方の世のおぼえは塵つくべうもあらぬ身を、世にとりては痴れがましう見思ふ人あらん、いみじきことなりかし」と思い、結婚を悔やむ。そして、自分の結婚生活を不審に思う男性の存在を意識し、出離を思うようになる。また、四の君に対しては、

タ 「…世つかぬ身の有様をいかに思しなるぞなど、いとほしうこそ嘆かれはべるに、心も知らず、殿のひとへに思し咎めさせたまはんこそいと苦しけれ。いかがおはし果てたまふべき。いさや、これより過ぎたるらん心ざしの行方も知りはべらざ

りけりや。人にはただ分くる方なく御あたり離れぬばかりを類なきことに思ひはべりける痴れ痴れしさも、みづからこそくやくも恥づかしくもかへすがへす思ひたまへらるれ」と、いとどやかにいみじう恥づかしげにて、忍びがたきふしぶしばかりをうちほめかして、
(巻第一)

以上、「男性的」と分類される語が、男女両者につかわれることで、その差が見えてくる。女君が、どんなに「男性らしく」ふるまっても、相手の女性は満たされることなく、慎重すぎる態度を訝しむ。女君をこの上ない人柄の人と思いつながら、男性的魅力に欠けると感じるのだろう。女君に男性としての限界があることはいまでもない。体格が男性の割に小柄であるという描写もあり、才能や人格では補いきれない部分があることが、これまで見てきたような語彙から表面化する。それは、肉体的かつ性的な面に見られる。女君が元服し出仕したのは、その「男性的」性格や才覚によるもので、女君ひとりでできることは、その「男性性」が大きな役割を果たした。しかし、女君が対人関係を築こうとする時、肉体的な問題は、どうしても解決できない。男装時代の人間関係において、宰相中将と四の君が、ことさら比重を置かれるのも、この二人こそ、肉体的な面だけでなく性格や魅力も「一般的」な男女であり、女君を反射する人たちだからであろう。したがって、この人たちの視点が多く書かれ、女君は立体化されていくのである。

ii 女君、本来の姿に戻って

女君が本来の姿を獲得してからは、「たをたを」と「なよなよと」「なよよかなり」「らうたし」「らうたげなり」など、一般的な女性の属性となる表現が頻出し、男性的なものの内側にある女性的性質という書かれかたは減る。いわゆる男性的表現は過去のものとして語られるようになる。実際に、宰相中将や男君など気の置けない関係の、秘密を共有する人の視点からは、男装であっても女性的資質が感じ取られるといった描写が多い。女君自身、知らず知らずのうち、男ぶることをやめ、心情がふるまいにも表れているのである。男装から女姿へと、時間の経過とともに見えていく。

次の子は、宰相中将と思いついていたころの様子で、視点は宰相中将によるものである。本来の性質である綱掛けの表現に加えて、波線のように、女性らしい美質が言葉を重ねて強調されている。すでに記したウを別の角度から見えていく。

子 乱れたちてうち靡き解けたるもてなしは、すべてたをたをとなつかしう、あはれげに、心苦しうらうたきさまぞ限りなきや。(中略) ひきかへ心苦しうにほひやかにうち靡き戯れもするに、けなつかしうやはらかに解けたるもてなしはた言はん方なく、…

(巻第二)

また、出産のために宇治に向かうきょうだいの別れるとき、互いに相手の中に自分の本来あるべき姿を見ている場面である。

ツ 督の君は、大将のはなばなとにほひ限りなき容貌の、いたく面瘦せたるしもいとどうつくしうらうたげなるに、おほやくもてすくよけたるほどこそ雄々しくも見えけれ、かやうに思ひしめり屈じたまへるはたをたをとははれになつ

かしく見ゆるを、世づかざりける身どもかな、我ぞかくてあるべきかしと、
(巻第三)

ツは男君からのものであるが、チと同じように、「らうたし／らうたげ」、「たをたをと…なつかし」と、男装していても、女性らしい形容がなされている。

また、異装を解いて女姿になってからの宇治での生活の様子である。

テ いとありつき女様になり果てて、はなばなと うつくしく
にほひやかなる 見どころいますこしまざりて、顔いたく思ひ
乱れ屈じしめりて、ひとへにうち頼みて身に添ひたるほどの、
今はわが身かくてあるべきぞかしと思ひ知りなよなよともて
なしたるは、ありし人ともおぼえずらうたげに たをやかなる
を、
(巻第三)

女姿が、「ありし人ともおぼえず」とされるところに、男装時代との隔たりがある。女姿となつてからは、男装時代の印象は見事に払拭される。女君を「なよなよ」「らうたげ」「たをやか」とする視点はすべて男性のものである。

若君を出産するが、そのくだりを宰相中将の視点で次のように描く。飾らない率直な人柄が描かれ、大変な状況にあつて女性的な部分が表示している。

ト 人柄の、容貌をはじめいとにほひ 多く愛敬つき、なかな
かいと見まほしきに、もてなし有様はればれしく馴らひたま
ひにしかば、いとあえかに埋もれいふせくはなく、わららかに
をかし、いと馴れたる心つきて、ものを思ひ嘆きてもひ
とへに思ひ沈みてはあらず、泣くべき折はうち泣き、をかし

く言ひたはぶるる折はうち笑ひ、言はん方なくくからず 愛
敬つき たまへる人の、まことにもの心細く苦しきままに、い
とたゆげになよなよと心苦しげなるを…
(巻第三)

苦惱に沈みきるわけではなく、「にほひ」多い美しさ、「愛敬」にあふれたさっぱりとしたふるまいの中に、女性らしい「なよなよ」が加わる。

男君らの助けもあつて無事に帰京し、次は、父左大臣との対面の様子である。男姿となった男君と、女姿となった女君を見た左大臣は、感無量の思いである。やはり「なよやかなる」とある。

ナ いみじく うつくしげに なつかしう はなやかなる 女の、髪
はつやつやゆらゆらとかかりていといみじくめでたくて、な
よやかなるさまにて居たまへるも夢のやうに、
(巻第三)

女君の生来の魅力については後述するが、以上のような表現は、異装解除後の女君の女性性を強調するためだけでなく、生来の魅力も増している。外見と内面の乖離が解消され、他人の目をさほど気にしなくなったためか。ここに反映されるのは、女君の外見と内面の合致である。また視点となる人物に男性が多いことも指摘しておく。男装時代、女君は男として男性と、夫として女性とも関わったが、女姿となつてからは男性との関わりが多くなり、女君の女性的な部分を感じ取るのは主に男性になっている。四の君が、女君を「雄々し」くない人と感じたことは前述したが、直接的に女君の女性性に反応するのが男性なのは興味ぶかい。

男装時代の女君は、その「行動」が男性的な語で表現された。女君が男とはいかにふるまうかを考え、それに基づいて行動する形で描かれる。一方、女姿となつてからは、たたまいや、在りかたの

ようなものが強調される。外面から内面へ移行した感がある。さらに言えば、表面的なものにとどまっていたものが、中身を伴った、内面から湧き上がってくるものとして描かれ、人物を充足させている。本来の姿に戻って以後、女君は物語を引っぱることはなくなっていく。

iii 女君の一貫した性質

表1を見ればわかるように、女君には、男装・女装に左右されない語がある。幼い時分、異装の時代、今尚侍となっても受け継がれていくもので、特定の人物でなく多くの視点が観取できるものである。これこそ女君の本質で、くりかえし語られる「愛敬」「なつかし」「にほひ」「うつくし」などである。男装の頃は、男姿の奥にある隠せないものとして、女姿となつてからは中核として描かれる。樋口育代氏は「はなばなど」が女君の特徴の最たるものと指摘された。それは用例の多さから賛同したいところだが、実は、時間の経過とともに減少し、今尚侍となつてからは一例も見出せない。女君の描写が激減したためとは言い切れないものがある。

「愛敬」「愛敬づく」「が計二十三例」「なつかし」が二十八例、「にほひ」「にほひやかに」など「にほふ」から派生した語が計二十四例となつている。また、「うつくし」をはじめ、派生語「うつくしさ」「うつくしげなり」「うつくしげさ」は計二十二例となつている。以上のような語は、誕生時、成長過程にも見られた。男姿であつても、男性的美質と同居するかたちで描かれている。むしろこれが女君の魅力の本質的なものであろう。先に引用したCを見ていただきたい。狩衣指貫の男姿に、「にほひ 満ちて、愛敬 は指貫の

裾までこぼれ落ちたるやうなり」とあつた。男装し、男子の教養を身に付けていきながらも、損なわれなかつた魅力として、女君の形容に使用されている。そこには反実仮想形で、「これももとの女にてかしづきたてたらんにいかばかりめでたくうつくしからん」ともあつた。

実情を知る父左大臣のような近親者だけでなく、麗景殿の女のように何も知らない人との交流においても、女君の様子は「近まきりはたなつかしう いみじく愛敬つきたるを」と表現された。先入観のない視点からでも、純粹に感じ取られる女君の雰囲気、女君が本来もつ性質であろう。また、吉野を訪れた女君は吉野の姉宮と親しむ様子が描かれ、「なつかし」が見られる。さらに姉宮との添い寝のみに終わった夜の後朝にも、次のように見られる。

二 姫君は、あいなく、人のけはひの なつかしう あはれなりつるにそこはかとなくうち語らはれつるを、… (巻第一)

また、吉野から帰京して右大臣邸を訪れた折、舅である右大臣の視点で「日ごろのほどに容貌はいますこしにほひまさりにける心地して、はなばなど 愛敬 はあたりにもこぼるるやうにて」とあつた(用例ソ)。また、前項で確認したように、女姿となるまでの経過では、女性的美質の表現と思われる語とともに、何度も語られている。

次に、今尚侍となつて、帝の垣間見による女君の様子である。女君は、男姿であつたときは違和感と厭世観に苦しんだが、それが解消してからは、彼女の持つ魅力は表面に出て、

又 督の君は少しひき下がりがりて、薄色ども八つばかり、上織物なめり、すこしおぼえたる袷の衣、袖口ながやかに引き出でて

口覆ひして添ひ臥したまへる、いみじううつくしの人やとふと見えて、**愛敬**はあたりににほひ散りて、ただ大将の御顔ふたつにうつしたるやうなれど、(中略)うちかたぶきたるにこぼれかかる髪の艶、下がり端、目もあやなるほどよりは、裾の上にうちやられたるほどいと長くはあらぬにやと推し量られて、丈ばかりにやあらんと見ゆれど、癖とおぼゆるほどの短さにはあらず、袷の裾に八尺あまりたらん髪よりもうつくしげにぞ見ゆる。(巻第四)

髪が比較的短いことさえ欠点とはならないほど、視点人物である帝を魅了する。

以上のように、明るく華やかな魅力を表す「はなばなと」は、男装時代の女君を象徴する語であつても、女君の描写に最終的には見られなくなり、女君の本質的な魅力を占めるのは、「愛敬」「にほふ」「なつかし」とするのが妥当ではないか。時間の経過や、女君の置かれた身分、状況、さらには男女間わずあらゆる視点から感じ取れる魅力が、女君の人柄の大きな部分である。つまり、彼女の魅力の根底にあるのは、人をひきつけてやまない親しみやすさや、生き生きとした輝くような美しさ、上品な柔らかさではないのか。

ところで、表3を御覧いただきたい。女君の美質、「愛敬」「はなばなと」「なつかし」「うつくし(げ)」は吉野の中の君に継承され、また、「にほふ」「うつくし」とその派生語などは、女君の美子である宇治の若君に見えてくる。吉野の中の君は、物語の決着時に、「女君」「四の君」を失つた宰相中将と結婚している。女君の美質を受け継いだ吉野の中の君は、また、四の君の美質「らうたし」「らうたげ」「こめく」「こめかし」なども受け継いで、女君や四の君を

失つた宰相中将の心の穴を埋めるように、造型されていることに気付く。

さて、ここで女君のまとめとした。女君の生涯を振り返つてみると、自己の解放という言葉が思い浮かぶ。意志の人であるとも言える。女君は、置かれた状況に満足することなく次の段階へと自分を解放しうる能力を付与され、開拓する精神力も持つ女性である。抑圧された自己を解放していく、その段階が彼女の生涯のように思える。女として生まれながら男として生き、最終的には女として最高のものを手に入れる。それでも新たな苦悩に頭をもたげることになるのだが。

女性が受動的に生きるしかない時代にあつて、能動的に生きるためには男の姿をする以外になかったのだ。自分を生かしたい、持っている能力を活かして生きたいという意志が女君の姿から伝わってくる。自己実現といつてもいい。きょうだいの異装に関して、父左大臣が何ら軌道修正を試みなかったということも手伝つただろう。父左大臣が無責任であると評価されることもあるが、結果として、彼は、きょうだいの個性を尊重したのである。才気活発な娘と引つ込み思案な息子を持ち、その姿に頭の痛い思いをしながらも、無理に枠にはめ込もうとしたりはしなかった。先行作品において支配的な父親像が一般的であり、子の運命を左右しようとした父親も描かれた。この物語の父左大臣は、一見すると無力だが、我が子の個性を大切にし、愛していた。子供の人生に介入して変えようとはしなかった。成人後の女君の苦悩と孤独は、はるかに深いものがあつたが。

ところで、石壁敬子氏は、女君の自意識を一貫して女性のものとして、一概には言い切れないのではないか。異装して男性としての生活を選んだことにとどまらない。女君の自意識の大部分が女性である面は確かだが、宰相中将と密通した妻四の君への感慨などは、「夫」としての自分への背信行為としかとらえず、四の君に対し、女性同士の同情や憐憫などは見られない。また、妻を寝取った宰相中将に対する思いも男性の意識と考えられる。女君は「夫」としての自分に疑問を持たなかった。男性としての意識や自負が多分にあつたと考えてよいのではないか。それが妊娠を契機に女性としての意識が凌駕していった。両性を併せ持っていたからこそ、彼女の異装時代は陰影に富んだものになったのである。

自分がどのように生きたいか、女君の人生はその意識に支えられている。自意識の芽生えが彼女の原点なのである。願望を実現する能力と手段をもとに、不要なもの、重荷に感じるものを切り捨てる力も与えられた。協力者なくして無理だったことはあつても、彼女自身の意志、実行力が原動力である。望んだ姿へと自分を解放する力と積極性が、彼女の魅力であり、両性を行き来できる人格を成したのである。それが作品の魅力でもある。

三 男君を特徴づける語彙から

この人は異装期間の描写は女君に比べて少ない。最初に引用したA、Bの用例に見られた程度である。引つ込み思案な性格ゆえに、女東宮の傍に仕えるという特殊な形で、尚侍となった。また、女君は社会経験から他人と自分を比較し、我が身のつたなきに泣かされ

たが、男君は自分を相対化することも、苦悩することもほとんどないため、内面の描写もない。また、視点となる人物からは女君の面影を背後にしての描写が多く、当初、女君の二次的な人物として造型されるが、本来の性である男姿に戻つてから物語を動かしていく。

幼いころから見られた性質に、 で困つたように「あて」「かをる」「なまめく」「なまめかし」がある。生まれて間もない頃、幼少の頃の様子は既に触れたので割愛する。

その後、新年の装いが次のように描かれ、父左大臣は感無量の思いで見ている。

ネ 中納言の顔の にほひ をうつし取りたらんほどに見分きがたきまで通ひたまへれど、これは、いますこし あてに かをり

なまめき たるところやこよなくをかしからん、あてに かをり (巻第一)

男君を見る人は女君と比較し、女君の姿に「あて」「かをる」「なまめく」が加わつていると感じる。幼少期においては個性と語彙に錯綜した形跡が見られたことは前述したとおりである。

異装の頃、宰相中将に侵入されたときの様子で、女君の面影もないわけではないが、第三者が感じ取る魅力が、女君のものとは明らかに異質のものであることが書かれている。

ノ 御髪は糸を繕りかけたるやうにゆるるかにこちたうて、あながちにも見つる御顔は、ただ中納言の、少し あてに かをり

すみたる気色添ひて、心にくく なまめき まさされり。(中略)

大方はいみじうたをたと あてに なまめかしう あえかな る気色ながら、 (巻第一)

女性として見ているせいでもあるが、女君の魅力に加わる彼独自

の魅力は、用例ネの記述とほぼ同じである。失踪した女君探索のため、男姿となった男君は宇治を訪う。両者とも確証はないが、相手を認識し感づいている。男姿となつてからは「なまめく」「なまめかし」に加え、「きよらなり(けうらなり)」という最高の美を表す表現が見られ、外見的な美が強調される。次の二例は女君の視点による。

八 言ふかぎりなく **けうらに** **なまめき** たる男のいみじく

あてなる **がさし出でたるに**、いとあやしくおぼえなくとうちまもらるれど、世に出で交じらひことごとしき人の見知らぬやうはなきに、さらにありしにはあらず、なほなほ下れる際とは見えず、わがありし世の鏡の影にて… (巻第三)

女君は男姿となった男君を見、自分の男装時代を鏡で見ると思う。乳母のはからいで、きよらだいの再会が実現し、異装を解いたお互いの姿に感激した場面では、

ヒ えも言はず **きよらに** **なまめき** たる男にておはするも…

と、「きよら」「なまめく」と同様の表現である。 (巻第三)

帝のお召しにより、今大将となった男君の参内の様子は次のように描かれていて、帝の視点から男君の印象が語られている。

フ 御前に参りたまへれば、とばかり御覧すれば、久しかりつる月ごろのほどにいとごよなくなりまさりにける心地して、
かをり **あてなる** とくろさへ添ひにけり。 (巻第三)

「かをる」「あてなり」は女君には見られなかった、男君に特有の魅力だろう。かつての女大將になかった性質が備わったということ、二人の「とりかへ」が、読者に理解できる。

男君は四の君に消息の後、契る。

へ 近きけはひなごの、男ながら乱れうち語らふなどは、**たをたを** **なよびかに** **なつかしかりし**を、これも同じ **なつかし** **なまめき** **ざまなれど**、さすがにまことの男はまた様ことなることにや、あやしとのみ思すに、… (巻第三)

四の君は以前と違ふ「大将」に困惑する。その時に登場人物を形容する語は読者に納得できる。「なつかし」は女君の描写に多用された。それが四の君を視点としたとき、「なつかしかりし」と過去形になっている。「とりかへ」を知らない四の君の困惑が描かれている。

「大将」が帰京したと知った宰相中将も、宇治から帰京し、参内する。

ホ もてかしづかれたまふさま、げにかくて馴らひけん人の、うち忍び隠るへてはあいなく思しなりけんことわりなり、とおぼゆるに、いとみじく**あざあざと** **きよらに** **にほひ** **かをり** **なまめき** たるとくろさへ添ひにけりと見ゆるに、 (巻第三)

帝、宰相中将とも、以前から魅力的であった「大将」に、新たな魅力が加わったと感じている。それが、男君に特有のものである。「かをる」や「なまめく」「あて」などである。

帝が今尚侍(女君)を垣間見る場面は既に触れた(用例ヌ)。ここでも男君の魅力が描かれる。真相を知らない人は、「大将」の変化を「ねびもてゆくままに」と理解するのである。

マ かれは、ねびもてゆくままに、**けだかく** **なまめかしく** よしめけるさまぞ似るものなくなりまさりたまふめる、…

次の用例も帝の視点によるが、「ねびととのひ」とある。今尚侍を垣間見、恋慕がつる帝は、今大将(男君)にその思いを訴える。

ミ ここそとおぼゆるところなくねびととのひ、あざやかに
きよらにめでたき容貌有様を御覧するに、… (巻第四)

視点となる人物は、かつての女「大将」に不足していたように感じられたものが備わったと思ひ、「ねびもてゆくままに」「ねびととのひ」などと納得するのである。形容に用いられる語彙の傾向、異装解除後の男君の行動を考えると、理想的男性の美質を備えた人物造型に、ある程度のつとつたものと考えられる。

男君の造型に深く関わる「なまめく」「なまめかし」という語がどのように選ばれたのか、先行研究が答えを出してくれている。梅野きみ子氏は、「光源氏の「なまめく」「なまめかし」美——「きよら」美と対照的に——」(『平安文学論集』1992・10)で次のように述べている。

「なまめかし」美は、もつと日常的で、自然のさりげない振舞いや声遣いの中に見出される美である。しかし『なまめかし』は、「最高の理想像」として描かれている光源氏を称える形容語として最も頻出しているので、「きよら」美とは異なる角度からではあるが、『源氏物語』において、主人公の卓越性を賦与するための一美的語彙と認めることが出来よう。そうした、主人公を美化する王朝的美的語彙は、以後の文学作品に多大な影響を与え、主人公の優美さを述べるときには不可欠な表現として定着することになるであろう。

この物語の男君の造型が、理想的男性像を継承しようとしているだろうが、『源氏物語』の世界にとどまらず、より概念的に、「なまめく」「なまめかし」という語を理解していきたい。

小島俊夫氏は「なまめく・なまめかし」の意味(『日本語と日本文学』第31号 2000・8)で、古典文学における「なまめく」「なまめかし」の用法について考察し、二つの結論を得ている。

一、なまめく・なまめかしが教養・風格に無縁の人物・事物の描写に用いられ、高尚美中の最高を示す人物の描写に必ずしも用いられず、むしろ同席する副次的人物の描写に用いられている。ゆえに、なまめく・なまめかしの意味には、風格美・精神美と認めべき蓋然性はない。

二、或る一つの言語表現の〈場〉において、或る登場人物が他の登場人物に官能的魅力を感じしめると認められる場合に、その人物がなまめく・なまめかしと描写され、時に性的官能をもつて人が人に近づく場合にも、この単語が用いられる。ゆえに、なまめく・なまめかしの意味は、人を魅する官能美と認められる蓋然性を有する。自然界の美、日常身辺の美においても、この単語が官能美として用いられると考えられる。

男君の性質や生きかたは、小島氏の論文の論旨にあてはまるだろう。「なまめかし」を精神美と解する説もあるが、この物語の男君に精神美は見出せず、男姿となつてからは、一般的男性同様、官能を好む傾向が強い。女君は性的な面に潔癖で、四の君との破局を招いたが、男君はおおらかに多くの女性と情を交わし、かつて女君が心を通わせただけの女性たちと実際に関係を築くことになる。

女君の魅力の本質が「愛敬」「なつかし」「にほふ」「うつくし」といったものであったのに対し、男君は「なまめく」「なまめかし」「きよらなり」がくり返される。よく似た顔立ちで、外見の美しさは両者に共通するが、男君は、より官能的な、肉体的な魅力に溢れた人物と考えられる。また、視点となる人物が女君に対して男性として不足に感じていた部分をすべて備えた男性的人物として男君は造型されている。

ところで、ここでまた、表3を御覧いただきたい。男君の「なまめく」「なまめかし」「あて」「気高し」などの美質は、実は妻となる吉野の姉宮、四の君に特徴的な語である。物語として、ペアを組む時に、男君と何か似た美質の持ち主をとり合わせたようである。物語をすつきり混乱させない書き方とも言えよう。

四 むすび

男君に内面描写が見られないのは、苦悩が少ないとか、男性の論理で生きていける人ということだけではない。女君は女性・男性の自意識の両面から社会を見、そこに生きる自己を見つめ、一般常識や社会規範から逸脱せざるを得ないことを自覚した。男君は内向的で引つ込み思案であるとか、消極的であるとかいう面はあっても、特に自分の中に女性を意識したことはなかったのではないか。異装の時代、男君の存在感は稀薄で、その個性は女君に相対化されてしまう。尚侍として宮中に上がり、ほどなく女東宮と睦ぶ仲となった彼は、性格的に人前に出ることをためらう傾向はあっても、はたして自分は女性として生きるべきだという気持があったのか。自我に

目覚めてから、この人の意識は常に男性であり、もともと女性的な心情は薄かったのではないか。強烈な個性の持主ではなく、自意識という点で、男君の感覚は女君の比ではない。異装を解いてからの葛藤もなく男性論理で生きていける人といわれるが、そもそも、恥ずかしがりやである以上に、この人の自意識に女性として生きる気持があったのかどうか。

異装の頃、男君は女君に相対化された、いわば副次的な人物であり、だれしも女君を通して男君を見るところであった。しかし、男姿となつてからの男君が物語の中心となつたように、四の君や吉野の姉宮らとの人間関係を幸福なものにしたのは、男君自身である。男君は、異装解除後、男性である自分に何ら違和を感じない人と描かれるが、この人の存在によつて救われるものは大きい。四の君をはじめとする女性たちの安定した幸福、左大臣家の繁栄、すべて男君が実現したものである。

女君の苦悩は同情するに余りあるが、彼女の苦しみは自分の在りかたに終始するともいえる。自らを恃むところの大きい人で、常に自分の背おつた負の要素を捨てていき、さらに良いもの、貴いものを手にするのである。彼女の不在は、吉野の中の君など、新たな人物を得て、同時に負の要素も解消されていく。

きょうだいの「とりかへ」によつて、女君は社会に出て翻弄されるが、彼女もまた他人の人生を乱していく。女性の生涯と幸不幸がこの作品の特色ではないか。

この物語をくりかえし読み、私は、徐々に女君以外の女性たちにも心が近づく思いがした。主人公の女君は魅力的な人物だが、他の女性が劣るとするのは余りにも早計であろう。まして四の君は、思

慮の浅い、さらに無意識的に好色な人としてことさらに低く扱われるが、この人の不幸は女君より深いものがある。女君はあくまで自己に忠実な人であり、彼女の生き様は勇敢だと感じるけれど、この時代のごく一般的な、「女性らしい」女性が四の君である。普通に考えれば、彼女等のほうが、女君よりもはるかに現実的である。女君の人生を支えたのは、彼女の自意識と左大臣家の家族だけではない。他の女性たちの存在によっても、女君は自分の道を進んでいくことができるのである。

『とりかへばや物語』はジェンダーの視座から取り上げられることが多く、女君は異装してまで社会規範に挑んだ女性として評価されるが、その反対側に女君によって翻弄された人があったことを忘れてはならない。その最たる人が四の君で、四の君を男性論理の社会にしか生きられない女としてしか評価できないとしたら、この物語は小さくなる。また、中宮にのぼった女君を、結局は男性社会に取り込まれた女と評価しては、本作の世界は小さくなる一方である。女君をはじめ、女性たちの多様な生涯を描くことが、この作品の到達した所であろう。

主人公の女君がなぜ、読者の心を捉えるか。男性を凌ぐことのできる才覚のある女性だからか。それだけではあるまい。自己を認識し、最大限生かしたいと思ひ、苦悩しながらも行動していったからである。良家の子女として苦勞せず生きていくこともできたが、みずから社会に適応するために、孤独に耐え傷つきながら生きていった。女君が、常により良いものを手にする運命にあったと述べた。しかし彼女は、良いものが転がり込んでくるのを待っていたわけではなく、現状を打破するために自分から働きかけた。そのために自

分をも他人をも傷つけることはあったが、その孤独も傷も引き受けた。女君は自分のために生き、他人のために自分の幸福をあきらめることがない。いや、徐々にそのように成長していったのである。

当初、女君は男君を守ること、左大臣家を守ることを考えていたのではない。しかし男君は、決断すべき時には毅然とした態度を取れる人なのだ。また、「男性論理で生きられる」というその性質も、それはやはり、女君にはない凶太さ、たくましさなのではないか。男君を、女君の役割を代行した人と述べたが、これはそのまま男君にも当てはまることで、自分の代わりに「男」を生きてくれていた女君が精神的危機を迎え、堪え切れなくなるまで、彼は守られていた。お互いの偽りと自己を認識し、真のかたちを求め始めたときから、ふたりのきょうだいは本当の意味で分化し自立したのではないだろうか。

独りよがりな面がないわけではないが、でも、この物語の女君は大変魅力的である。賢く、凛々しく、清々しく、美しい。彼女は生きていく中で、男性とも女性とも、例外的な関わり方をした。もとより美しい人であるが、外見と内面が一致したとき、匂い立つような美しさをもった女性として描かれた。自分を偽ることがなくなつて初めて、彼女の心に平安が訪れたのである。

付記

本稿は平成十八年度大学院共同研究費による成果の一部である。指導して下さった加藤静子先生に深く感謝申し上げます。